

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 8 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24616023

研究課題名(和文) 高齢者介護に関わる人材の資質向上プログラムの作成と効果測定にかかる研究

研究課題名(英文) Research applied to the creation and effect measurement of human resources quality improvement program relating to elderly care

研究代表者

備酒 伸彦 (Bishu, Nobuhiko)

神戸学院大学・私立大学の部局等・教授

研究者番号：80411883

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)：ケア人材の資質向上を企図した教育プログラムを開発するため、2012～2014年度の間に通算70名の受講者を対象に、150時間/年×3年の教育プログラムを策定・実施し、その効果測定を行った。受講者からの聴取・ケア現場の視察・聴取を通じて、総じて「ケア技術」を習得する機会は様々に設けられている反面、「人の理解」「看取り」等の基礎的知識や考え方について学修する機会が希薄であることが分かった。

これを受けて、人を理解して、その暮らしを支援することに重点をおいた教育プログラムを策定し実施した結果、「根拠をもって介護に臨めた」「自らの仕事の意義を再認識できた」といった効果を得た。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is develop an educational program that contemplates the qualities improvement of care human resources, intended for students of total 70 people between 2012-2014 fiscal year, and to develop and implement a training program of 150 hours / year × 3 years, its effect measure I went. Through inspection, listening listening-care field from the students, but on the other hand has been variously provided opportunity to collectively learn the "care technology", and Master of the basic knowledge and concepts such as "understanding of the people", "end-of-life care." opportunity I was found to be sparse.

To that end, to understand the person as a result of the to be established and implemented educational programs that focused on supporting the life, it was possible to re-recognize the significance of "to overlook were nursing care with a rationale" "own work I got the effect such as ".

研究分野：ケア分野

キーワード：高齢者ケア ケア従事者 資質向上 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

高齢者ケア労働者は離職率が高く、ケアサービスを安定的に供給することの妨げとなっている。その理由をケア労働者の側から見ると、低所得や重い労働負担もさることながら、教育・研修機会がないことによる労働意欲の低下がある（介護事業所における介護労働実態，介護労働センター調べ，2011）。

また、提供されるケアサービスの質から見ると、ケアに当たる人材の教育背景により、その資質に明確な差異が認められる（橋本美香，介護福祉士資格の有無及び経験年数による認知症ケア比較，東北文教大学紀要，1，105-112，2011）ことも明らかである。

これらの諸課題に対して、介護報酬の見直し、介護福祉士の養成促進、現職研修などの方策が検討・実施されているが、具体的に質の高いケアサービスを安定的に提供するための方策として十分なものとなっていない。また、対人サービスの担い手となるケア人材は、幅広い教養と、専門的な知識・技術を身につけることが必要で、そのためには深く・広く学ぶことのできる教育プログラムが求められる。

2. 研究の目的

高齢者ケアに関わる人材が量的に不足していることが大きな問題となっている。また、ケア現場では介護福祉士、ホームヘルパー、無資格の人材など教育・知識背景が異なる人材が混在し、質的な面でも解決すべき課題は多い。

本研究はこのような現況に鑑み、i 応募者が勤務する大学・研究組織と、高齢者介護施設が連携して、ケアに関わる人材の資質向上を図るプログラムを策定・実施し、ii 教育プログラムの効果を明らかにし、iii 他大学・他教育機関でも実施できる教育プログラムを策定する。

3. 研究の方法

高齢者ケアに関わる人材の資質向上に有効な教育プログラムを作成するために、

① ケア学、リハビリ学、医学、哲学、死生学、統計学の研究者、医学教育の実践者からなる研究組織において、高齢者ケアに求められるサービスの質について検討した上で、教育プログラムのカリキュラム・指導方法・教科書を作成する。

② ①の産物を活用して、応募者が実施責任者となっている「神戸学院大学社会人キャリアアップ講座」において、教育プログラムを実施する（30人・120～150時間／年を予定）。

③ ②の効果測定を行い、その結果を①の研究組織にフィードバックし、より効果的な教育プログラムを検討し、他の大学・教育機関でも実施可能な教育プログラム（カリキュラム・指導方法）を作成する。

4. 研究成果

1) 教育プログラムの検討

研究組織において、高齢者ケアに関わる教育内容について検討を重ねた。この際、2008年度～2010年度に我々が行った「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」による「障害高齢者・障害者を支える人材の資質・意欲向上を目的とした社会人の学び直し事業」（文科省委託事業）の成果を活用し、基礎的なプログラムとした。

その上で、初年度参加者14名、いずれも高齢者ケア現場に勤務する者から、高齢者ケアにかかる①課題（環境・人材の資質・OJT）、②望まれる教育内容、③職場での待遇等について聴取し、相互に討論を行う機会を2時間×3回実施し、その結果を研究組織にフィードバックし教育プログラムを再検討した。

同様の検討を、研究期間中に繰り返し実施し、次に示すような教育プログラムを発展させた。



受講者による討論の風景

2) 策定した教育プログラム

(2012年度)

高齢者ケア論・演習	30コマ
高齢者ケア実技	10コマ
認知症ケア論・演習	10コマ
生活環境・ユニバーサルデザイン概論	15コマ
一般教養（哲学・死生学）	10コマ
ゲスト講義（ケア実務者等による講義）	10コマ

総履修時間

90分×85コマ 127.5 時間

(2013年度)

高齢者ケア論・演習	30コマ
高齢者ケア実技	10コマ
認知症ケア論・演習	10コマ
一般教養（哲学・死生学）	10コマ
ゲスト講義（ケア実務者等による講義）	10コマ
看取りに関する論	18コマ

総履修時間

90分×88コマ 132 時間

(2014年度)

高齢者ケア論・演習	30コマ
高齢者ケア実技	10コマ

認知症ケア論・演習	10コマ
一般教養（哲学・死生学）	10コマ
ゲスト講義（ケア実務者等による講義）	10コマ
看取りに関する論	20コマ
総履修時間	

90分×90コマ 135 時間

3) 教育プログラムの実施

受講生が高齢者ケアの実務者であることから、原則として日曜日の開講として、講義・演習をビデオ撮影し自習が可能な環境を整えた。



講義風景

4) シンポジウムの開催

教育プログラムの効果検証と、看取りに関する学びの成果を整理することを目的に、2013年度・2014年度に公開シンポジウムを開催した。



シンポジウムの風景

5) 教育プログラムと効果測定等 (教育プログラム)

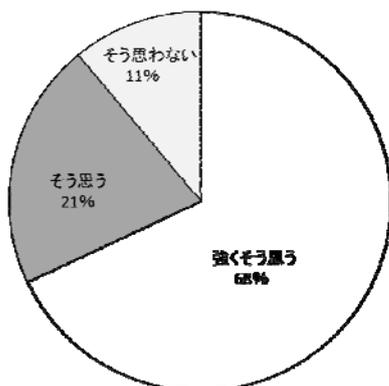
先述のように、教育プログラムの策定、講義と演習による教育プログラムの実施、

受講生からの聴取と討論による教育プログラムの検証を繰り返し行った。

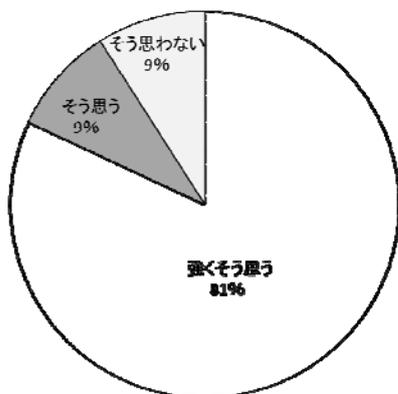
その結果、2014年度に実施した次のような教育プログラムに一定の効果があることと、実際に高齢者ケアに従事する者にとって受講が可能なが分かった。

高齢者ケア論・演習	30コマ
高齢者ケア実技	10コマ
認知症ケア論・演習	10コマ
一般教養（哲学・死生学）	10コマ
ゲスト講義（ケア実務者等による講義）	10コマ
看取りに関する論	20コマ
総履修時間	90分×90コマ
	<u>135時間</u>

(効果測定等)



あなたの同僚は、職場での教育を求めていますか。



教育プログラムを受講したことにより、業務に有効な変更がありましたか。

その他、受講生からの聴取内容の代表的なものを列記するとつぎのとおりである。

- ・教育プログラムが必要なことは自明であるが、実際に受講するモチベーショ

ンをもった職員が多いとは思えない。

- ・そもそも高齢者ケアに関する考え方が定義されておらず、結果的に職能ごとの技術にとどまっている。
- ・施設管理者にとって、学習を重ねる職員は好ましく映っているか否かは不明。
- ・本来、現任教育ではなく、卒前教育プログラムとして、高齢者ケアに関わる者全てに提供されるべきである。
- ・受講により根拠をもって仕事に臨めるようになった。
- ・自らの仕事の意義を再認識できた。

以上のような成果を踏まえ、後述のような発表等を行った。また、本研究の成果は、今後も本学で実施する高齢者ケア人材の教育プログラムとして活用するとともに一層の発展を図る。

5. 主な発表論文等

- 1) 竹之内裕文, 死と正面からむきあう—その意義と歴史的背景, 2014, 緩和ケア, vol. 24, NO. 2, 86-92 (査読有)
- 2) 竹之内裕文, 死の苦しみと希望はどこにホスピス・緩和ケアに携わる人のために, 緩和ケア, 2014, no. 2, 112-117 (査読有)
- 3) 川越雅弘: 地域包括ケアシステムにおけるリハビリテーション, 総合リハビリテーション, 2014, 42(7), 609-614 (査読有)
- 4) 備酒伸彦, 北欧ケアとわが国の高齢者ケアの比較—自立支援を考える—平成22-24年度科学研究費補助金「北欧ケアの実地調査に基づく理論的基礎と哲学的背景の研究」研究成果報告書 p. 117-126 (依頼原稿)
- 5) 竹内さをり. 実践生活行為向上マネジメント 通所事業所・老人保健施設における実践. 2013. 作業療法ジャーナル, 47(5):400-403. (依頼原稿)
- 6) 竹之内裕文, 死すべきものとして共に世界に住まう—復興の基本理念によせて, 2013, 東北哲学年報, 第29号, 111-139 (査読有)
- 7) 竹之内裕文, 北欧ケアの社会的基盤と思想的拠り所—日本社会におけるケアの

再構築のために, 2013, 文学と哲学, 第 30 号 1-37 (査読有)

8) 川越雅弘: 理学療法士に期待される役割—地域包括ケア構築に向けて—, 理学療法学, 40(3), 230-234, 2013. 6.

9) 川越雅弘: 都市部と郡部における在宅医療・介護サービス提供体制構築上の課題—福岡県を事例として—, 季刊社会保障研究, 49(1), 56-65, 2013. 6. 15)

10) 備酒伸彦, 高齢者ケアに関わる理学療法士はなにをなすべきか・なにができるか, 2013, 理学療法学第 39 巻第 4 号, 245-248 (依頼原稿)

11) 備酒伸彦, 自立とは何か, 訪問リハビリテーション, 2013, 合同会社 gene, 第 2 巻第 5 号, 269-274 (依頼原稿)

12) 竹之内裕文, 生命倫理学から生命環境倫理学へ——生の「現実」に応答する倫理学をもとめて, 2012, 思索, 第 45 号 (2), 321-344 (査読有)

13) 川越雅弘: 要介護高齢者に対する自宅退院支援の現状と課題, 静岡県医師会報, 6-9, 2012. 9. 22) 川越雅弘, 鍋島史一: 医療計画の見直しに向けて—福岡県の二次医療圏別にみた人口動態の特徴、2010 年と 2025 年の比較—, 福岡県医報, 77-84, 2012. 9. 23)

14) 竹内さをり, IADL と作業療法, 2012, 作業療法ジャーナル, 46 (1): 40-43. 24) 竹内さをり, 北欧と日本の認知症ケ, 2012, 地域リハビリテーション, 7(10): 863-866.

15) 山本大誠: 北欧と日本のケア—教育の立場からの比較、地域リハビリテーション, 7(11), 956-959, 2012 年

[雑誌論文] (計 17 件)

[学会発表] (計 3 件)

1) 備酒伸彦, 「これからの高齢者ケア」, バリアフリー展大阪, 2014 年 4 月 17 日, インテックス大阪 (大阪市)

2) 備酒伸彦, 「ケアマネジメントに求め

られるもの」, 備北地域多職種連携研修会, 2014 年 9 月 27 日, ペペラホール (三次市)

3) 竹之内裕文, 死すべきものとして共に世界に住まう——北欧「福祉」が照らした課題, 東北哲学会第 62 回大会シンポジウム, 2012 年 10 月 20 日, 東北大学 (招待講演) 2013

[図書] (計 2 件)

1) 山本大誠: 理学療法の職域開拓 1. 精神領域の理学療法、理学療法概論 (奈良勲編), 医歯薬出版株式会社, 東京, 347-351, 2013 年

2) 山本大誠: 精神疾患患者の生活習慣に関する理学療法、心理・精神領域の理学療法 (奈良勲, 富樫誠二, 仙波浩幸, 山本大誠編), 医歯薬出版株式会社, 東京, pp. 113-121, 2013 年)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

http://www.kobegakuin.ac.jp/social_contribution/lifelong/careup/img/pdf_kaken.pdf

6. 研究組織

(1) 研究代表者

備酒伸彦 (54)

研究者番号: 80411883

(2) 研究分担者

川越雅弘 (53)

研究者番号: 00435778

(2) 研究分担者

川越雅弘 (53)

研究者番号: 00435778

(3) 連携研究者

浜渦辰二 (62)

研究者番号: 70218527

(3) 連携研究者

竹之内裕文 (46)
研究者番号：90374876

(3)連携研究者
村尾浩史 (52)
研究者番号：30298773

(3)連携研究者
竹内さをり (45)
研究者番号：90454727

(3)連携研究者
村尾浩史 (46)
研究者番号：90374876

(3)連携研究者
山本 体誠 (41)
研究者番号：10411886